

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 14 日現在

機関番号：17201

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00340

研究課題名（和文）薫物文化の包括的把握と再興に向けた文献学的研究

研究課題名（英文）Philological Study on Takimono Culture Towards Comprehensive Recognition and Revitalization of Takimono Culture

研究代表者

田中 圭子（TANAKA, Keiko）

佐賀大学・地域学歴史文化研究センター・特命研究員

研究者番号：20435051

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,800,000円

研究成果の概要（和文）：2018、2019年度には公益財団法人陽明文庫と武雄市歴史資料館で貴重書の閲覧調査を実施。調査結果は2022年度までに査読付き研究論文および国際研究集会での発表として公開した。コロナ禍により2020年度以降の活動は変更を余儀なくされたが、実施期間の2年間の延長が許可され、オンライン環境の急速な普及も追い風となり、2022年度まで継続的に成果を発表することができた。

本補助事業の波及効果として、市民グループの薫物を利用した地域振興活動に協力した他、古代の材料で薫物を復元する産学共同研究にも参加した。また、私立大学が地元企業と協力して通年で開催するワークショップの企画運営にも参加することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近現代の日本古典文学研究（物語研究）において、薫物・香に関する伝承や説話は、物語の古注釈書の動物に引かれた伝承等の検証ないし補足の為に利用されるのが通例である。しかしながら、物語に現れない種類の薫物や、物語との関連性が一見不明な同時代の香関係の逸話にも目配りすることで、作品の時代ごとの文化的実相に適った解釈が可能になる。

PIは薫物の材料の蒐集と調査に取り組み、その中で、平安時代の材料調達が輸入にのみ依存せず、一部は国内で育成、複製されたことを究明した。2023年度に発表予定の研究論文では、薫物・香の文献研究の視点や経験を平安時代の物語研究に反映させ、新たな解釈を提起できたと自負している。

研究成果の概要（英文）：In FY 2018 and 2019, we surveyed the historic documents on Takimono and other aromatic products at the Yomei Bunko and the Takeo City Museum of History. The results were published as peer-reviewed research papers and presented by us at international research conferences until FY2022. Although the corona disaster forced us to cancel or change our research plans after FY2020, the rapid development and spread of the online environment enabled us to continue presenting our results at those conferences.

I assisted a citizen's group in conducting community development activities using the scented materials. I also participated in an industry-academia collaboration research project that included the restoration of traditional Japanese Takimono using traditional materials. In addition, I have started cooperating with a private university as an information provider and lecturer in a workshop course held throughout the year in collaboration with a local company.

研究分野：日本古典文学；日本伝統文化

キーワード：薫物 薫香 香 古典籍 文献調査 物語研究 唐物

1. 研究開始当初の背景

研究代表者(以下、PI と略す。)は、日本の薫物文化がいつ、どこで、誰によって始まり、どのように行われながら後世に受け継がれたのかという問題点についての実証的な跡付けを目指し、平安時代から江戸時代までの文献を対象とした調査研究を行ってきた。その中で、薫物の文献が、隣接領域 という認識のもとに多様な分野の専門家により蒐集、研究されてきたことが判明した。例えば、『河海抄』等の『源氏物語』古注釈書では、物語本文の解釈や物語の准拠した時代と人物の推定と検証に、薫物の伝承が参照されてきた。一方で、『源氏物語』以降の時代に類纂されたと伝わる薫物の秘伝書に記載された薫物の種類は、『源氏物語』梅枝巻に名前のあがったものが大半を占め、梅枝巻の記述内容は、薫物の香りの根本として珍重される。『源氏物語』の言説が、以後の薫物文化の根幹を方向付けた可能性が考えられるのである。

日本古典文学作品と薫物文化との影響関係は、『源氏物語』から数世紀を経た時代、薫物文化が新たな発展を遂げる段階においても持続していた可能性がある。PI は、平成 26-28(2014-2016)年度 JSPS 科研費補助事業(研究番号 26580046)で中世近世薫物文化の文献学的研究に取り組んできた。その成果として、薫物の秘方秘説の授受、継承に係る「流(流派)」と呼ばれる人脈と手続が、室町時代から江戸時代にかけて存在した可能性とともに、処方と名称の新たな種類として室町時代に発祥したとされる「新作薫物」の構想段階において、考案者が古典文学作品の著名な表現と情趣に取材して調香、命銘を行った可能性についても報告を重ねてきた。

本研究課題の申請を実施する平成 29(2017)年 11 月現在において、PI は、既存の目録類において所在の判明している薫物関係の古文書古典籍の内、主要と見られる資料の特定及び文献調査を概ね完了している。ただし、次の 及び の課題については未着手の状況にあった。

平成 26(2014)年度に発行された『香道文献目録 所蔵館別』(翠川文子氏)において所在と概要の明らかにされた、薫物関係の新出資料群(陽明文庫所蔵、69 件 154 点)の詳細な調査及び本文テキストの収集。

明治時代以降に書写されたと伝わる薫物関係の文献の詳細な調査及び本文テキストの収集。

上記の内 については、先行研究及び PI の従来の研究において調査や資料収集の対象外とされており、近世以降に旧来的な薫物文化がどのような形で継承され変容したかという問題については、古代から近代の実相以上に不明なままとなっている。

以上の課題や問題により、日本の薫物文化の包括的把握は達成できていない状況にあると言わざるを得ず、過年度に実施した科研費補助事業計画に継続する形での、新たな研究計画の実施が課題となっていた。

2. 研究の目的

研究開始当初の目的は、日本の香文化のうち、複数の香料を調合して成る薫物(たきもの)についての古代から近代までの文献を調査研究し、製法の考案や相伝に関する史実、伝承を集積、検証することにより、薫物文化の実相及び史の変遷について時代横断的かつ包括的に明らかにすることであった。具体的には次の から の達成及び実施を主眼とした。

平安時代から明治時代まで継続的に享受された伝統的な薫物の製法を継承する具体的な方法と、長期に渡り継承された背景(機能性、社会における役割、等。)を解明する。

日本の古代から近代までの文献に記載された薫物の製法を集積したデータベースを構築して電子公開することにより、恒久的に利用可能な研究資源として整備する。

薫物文化の全容と史の変遷について、特にその衰退の時期と要因に係る通説及び先行研究を文献学的に検証することにより、薫物文化の新たな 興亡 の歴史像を提起する。

コロナ禍による古典籍調査の中断により、残念ながら のうち明治期の文献調査及び 及び については研究期間中に完遂できず継続課題となったが、 については、特に平安時代から江戸時代までの文献の調査結果に基づく成果発表を充実させることができた。また、3. 研究の方法及び 4. 研究成果でも述べているが、本研究の当初予定を柔軟に変更し、研究方法に移動可能な居住地域における異分野の研究者との連携やオンライン活動を新たに導入したことで、本研究の題目にもある最終目標である<薫物文化の再興>につながる学際的な活動を充実させ、研究成果の社会への還元による複数地域の振興活動に貢献することができたと自負している。

3. 研究の方法

開始当初の平成 30(2018)年以降の 2 年間は、資料を調査研究するための期間として位置づ

け、PI による文献調査を実施しておらず構築中のデータベースに蓄積できなかった新出資料群（陽明文庫所蔵、69 件、計 154 点）と、明治以降に類纂された秘伝書を対象とした原本調査、及び本文データの集積を行う計画であった。これにより、中世近世薫物文化の研究資源として構築してきたデータベースを補強するとともに、データベースの対象期間を古代から近代まで拡張するとともに、主要と見なした伝書の本文と書誌に係る資料研究成果については、所属機関や所属学会で刊行している学術雑誌への掲載を目指して順次論文を予定していた。

しかしながら、翌令和元（2019）年度以降のコロナ禍による活動制限により、上記の計画は中止や変更を余儀なくされ、特に明治期以降の文献の調査研究については、所蔵先への配慮から、継続が不可能となった。この事態に臨機応変に対応するべく、データベースの完成については継続課題とした。また、従来蒐集して未整理、未検討であった文献を対象とした考察に着手した。これらの活動の成果は、令和 4（2022）年度末までに、所属学会での口頭発表や学術図書での論文発表という形で発表ないし投稿した。

研究期間全体を通じた活動予定として、国際的な議論の交わされる研究集会等への参加及び成果報告を継続的に実施して、国内外の日本文学研究者を始めとして、日本の薫物文化の源流と目される東アジア域内の香文化の文献学的研究に実績のある研究者や、医薬史及び香文化史及び香化学等の隣接領域の専門家との、協働関係の構築に向けた学際的交流及び情報交換にも積極的に取り組むことを掲げていた。これらはコロナ禍でも所属学会がオンライン化やハイブリッド化を推進し、所属機関においても業務のオンライン／リモート化が迅速に普及してゆく中で、国内外の研究集会に継続参加することが叶い、そのおかげで、当初の目標を達成できたと自負している。

また、研究成果を用いたアウトリーチ活動として、次の 及び 等の開催も計画していた。

社会福祉協議会等の主催による視覚障害を持つ古典学習者を対象としたワークショップ等に積極的に出講して、古典文学作品に関係のある薫物及び「新作薫物」を文献の記述により復元して補助教材として活用し、作中の情趣や人物像についての理解度の向上に役立てる。

所属機関の国際交流行事として例年開催される、海外提携校の外国人学生を対象としたワークショップ等の講師を積極的に担当し、薫物文化を体験的に学習できる機会を提供する。

については初年次に 1 度実施することができたが、2 年次以降は残念ながらコロナ禍による対面活動の規制により中止となり、継続課題となった。についても、対面での交換留学事業や留学そのものが困難な時期が令和 4（2022）年度まで継続したことから、新たな活動への変更を余儀無くされた。しかしながら、既に所属機関に在籍する留学生や外国人材を交えたワークショップは、ハイブリッド方式により実現し、感染対策を十分に行った上で、令和 3（2021）年度以降に継続して実施することができた。

上記のアウトリーチ活動（ワークショップ）は、平安時代や室町時代の薫物の処方をもとに、材料を蒐集してそれらを調合するというものである。参加者が日本の薫物文化の歴史や実相についての実証的かつ最新の知識を身に付け、こうした文化に材料の段階から接することにより、古代や中世の人々の美的感覚や生活文化を体験的に学習することのできるようなプログラムを構築し、実施している。材料の調達は、安全性の確認された市販品を調達して使用していたが、一部の材料については市販されず、調達方法を検討することにした。

これらの材料の一つについて、文献には「黄菊の花を乾燥、粉碎したもの」であり、「身近なところで採取、加工する」ことが示唆されていた。コロナ禍で県境をまたぐ移動が制限される中で、これらの市販されない材料の蒐集を目的に、自然と居住地域の植物学・農学研究者とのネットワークにチャレンジした。幸い、これらの研究者の理解と協力を得ることができ、古来日本をはじめとする東アジアの諸地域に自生したことの判明している黄菊を始めとした多種多様なキクを育成、研究する広島大学大学院統合生命科学研究科附属植物遺伝子保管実験施設に紹介いただき、PI による採集、利用が認められるようになった。

同施設はキクのゲノム研究の日本における拠点であり、長年にわたり育成と調査研究が実施されてきた。育成されたキクは、一部が遺伝子研究の資材として利用される他は、遺伝子の混雑化を防ぐ必要から、毎年廃棄されているという。PI は、平安時代以来の薫物の一つである「菊花（きっか）」の材料となる黄菊として、キクタニギクを令和 3（2019）年度以降に毎年譲渡いただき、ワークショップや産学連携研究の資材として活用している。



（写真：キクタニギク；令和 4（2022）年 11 月 PI 撮影）

本補助事業で実施するワークショップに、キクタニギクを始めとしたキクの一部を摘花して利用することにより、いわゆる園芸残渣(ごんさ)の低減と利活用、文理融合の活動につなげることができた。こうした活動を通じて、思いがけず SDGs 目標(4. 質の高い教育をみんなに; 12. つくる責任 つかう責任)の達成にも貢献することができた。また、古代からわが国で自生し、前栽などでも栽培された植物に、< 薫物の材料 > としての用途のあったことを文献から読み解き、それを実践したことにより、4. 研究成果に示したような口頭発表や論文発表につながる気付きを得ることもでき、心から感謝している。



(図 : 国際連合広報センターウェブサイト掲載 SDGs ロゴ)

なお、本補助事業の実施期間を3年から5年に延長した経緯として、コロナ禍による研究計画の中止や変更に伴う研究の遅延、及び貿易・経済状況の急変による半導体不足の為の機器備品調達の遅れによる影響を受けたことを申し添える。また、困難な時期に期間延長という格別のご配慮を賜ったことに対して、改めて心より感謝申し上げます。

4. 研究成果

日本文学(日本古典文学)及びその隣接領域である日本伝統文化の研究に資する主要な研究成果として、文献の翻刻や解題を中心的記事とした論文以外にも、次の2件の論文を発表することができた。

これらの考察を行うきっかけとなったのは、コロナ禍により研究目的及び方法の変更を余儀なくされた中で、PI がキクタニギクなどの植物を薫物の材料として自ら採集、加工、利用する作業を経験したことである。薫物を調合していた古代人たちが、身近な植物にどのような関心を向けていたのかを体験的に理解しようとしたことがきっかけとなり、従来の研究成果や通説について考え直す意欲やヒントを得ることができた。

(1) 平安時代の物語作品の解釈について(学術研究論文、単著、「『その道の人』匂宮の前栽へのまなざし」、令和5(2023)年発表予定(後掲の図書2に収録予定))

近現代の物語研究において、薫物・香に関する伝承や説話は、物語の古注釈書の動物に引かれた伝承等の検証ないし補足の為に利用されるのが通例である。しかしながら、物語に現れない種類の薫物や、物語との関連性が明確でない香関係の逸話にも目配りしながら読み返すことで、平安時代の文化的実相に適った解釈が可能になるのではないか。この予測の下に、『源氏物語』の薫物・香 というテーマについて、匂宮巻を主たる考察対象とした研究論文の執筆に取り組んだ。

『源氏物語』において、当時の香文化に関する情報が最も頻繁かつ明確に現れるのは、匂宮巻に始まる宇治十帖ではなく、梅枝巻を中心とした光源氏生前の物語だからである。宇治十帖では、男主人公たちの人物を語る上で、薫物・香が極めて重要な要素となっているが、諸本の現状には、薫物の固有名称が一つとして明記されない。薫物の材料(以下、香具)についても、調度の資料として数回現れるのみである。そのため、薫物・香の観点から宇治十帖を考察することは、宇治十帖よりも前の巻における物語ほどには行われて来なかった。

宇治十帖の匂宮は、薫物に関心持ち、日々その処方を集め、調合しては身に着ける暮しを送る。物語では、彼が香りに対する関心が高いことを前提として、香りの高い草花や、香りのしない植物を、見ごろを過ぎた時期まで大事にしているとされるところについて、古くから議論がなされて来た。本研究では、こうした動静は、匂宮がこれらの草花を薫物の材料としても着目しており、そのため枯れて香料とするには適した時期まで前栽から取り除かず大事にしていると推定するとともに、香りのしない草花については、それが香りを連想させる名称であり和歌にも香りとの関わりが詠まれてきたことなどから、枯れるなどして状態が変わることで、芳香が強くなる、といった変化を期待して見守っていた可能性を指摘してみた。

身近な植物から薫物の材料を模索するという動静は、薫物や香に関わる古代人の逸話としても知られている。ただし、これらは匂宮のように高位の人物の動静としては知られていない。宮でありながら中流以下の臣下のように薫物に熱中する匂宮の姿勢が、物語の語り手や世間の人々をして、光源氏には見劣りすると感じさせる要素の一つとなっている可能性は、検討に値する。

(2) 平安時代における香薬(こうやく)の入手経路について(学術研究論文、単著、「薫物と唐物」、令和4(2022)年発表)

薫物の材料となる香薬について、従来の研究では、<貴重で高価な舶来品であり、大宰府経由で調達された>と報告される。主要材料のほとんどは、国内に自生しない植物を原材料とするもので、国外から限られたルートを通じて日本にもたらされ、高額でしか入手できない舶来品、いわゆる唐物であった。品の上下に関わらず、すべての材料をそろえることは、日本にありながら薫物を調べようとする人にとり、最初にして最大の難関であったに違いない。

研究では、日本古代の薫物の主要な材料とされた香薬についての史実や言説を駆け足でひもときながら、平安時代を中心とした時期における、薫物の材料とされた唐物をめぐる試行錯誤の実相について紹介した。

平安時代の日本の薫物文化は、広大な国土から産出される多種多様な香薬と本草学の英知を資源として、紀元前には文化的発展を遂げていた中国の王朝の香文化に比べれば、依然として発展途上の状態にあった。調査の結果、材料となる香薬の一部については国産品や代用品・模造品の調達が可能になっていたことが明らかとなった。全体として輸入依存の状態にあり、文化としての持続可能性の慢性的な不安要素となっていたのは間違い無さろう。

本研究では、香薬や薫物を専門的に扱った人々による、唐物の国産化や代用、模造といった取り組みには、日本の風土と人の心に寄り添いながら、大陸に発祥した医薬や薫物の処方洗練させる効果があったと評価してみた。日本の薫物文化が、何世紀もの長きに渡り継承され、発展を遂げたのは、先人による試行錯誤の賜物であったと考える。言い換えれば、上記のような困難は、平安時代の古代人に、たゆまぬ試行錯誤を試みるための知恵と、江戸時代までこの文化が持続せられるだけの工夫をもたらしたとも解釈できるだろう。

以上の成果の他に、研究成果を利用したアウトリーチ活動を通じて、日本伝統の薫物の調合を持続可能性のある手順や方法により体験し、薫物についての体験的な知見を備えた人材の育成にも取り組むことができた。ワークショップは学生や教職員、地域住民を対象に、国籍や年齢を問わず行った。研究成果を地域社会や市民に対して分かりやすく伝えたり、若い世代の人々にこの分野についての知識や技能を広めたりすることにより、薫物文化の普及と日本伝統文化への関心の啓発を図ることができたと自負している。

なお、本補助事業の波及効果として、次のような活動も実施できたことをご報告しておく。

薫物の商品化やそれによる地域振興を図る市民グループ(平泉のかをり創造プロジェクト)の発足や代表者による起業を支援(令和元(2019)年度以降)

異分野(特に植物学分野)の研究者・研究施設や研究成果を利用した共同研究への参加(科研費補助事業及び産学連携事業、令和元(2019)年度以降)

京都の私学が地元企業と協力して在学生を対象として開催するワークショップ講座への参加(情報提供担当及び講師として。令和4(2022)年以降)

これからも、学際的かつ異分野融合的な取り組みや文献学的手法による研究成果をもとに、日本古典文学や日本伝統文化の分野の次代を担う若手の育成、及び地域や産業の振興に、微力ながら寄与できれば幸いである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 田中圭子	4. 巻 275
2. 論文標題 薫物と唐物	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 「唐物」とは何か; アジア遊学	6. 最初と最後の頁 196, 203
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 中城邦子 (執筆), 田中圭子 (監修)	4. 巻 11
2. 論文標題 日本の香りの歴史	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 はれ予報	6. 最初と最後の頁 36, 37
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 田中 圭子	4. 巻 5
2. 論文標題 陽明文庫所蔵「焼物の方」翻刻と校異 附・『薫物調合秘方』人名家名等解説及び索引	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 薫物書の研究	6. 最初と最後の頁 1-91
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 田中 圭子, 中野 道治, 北島 宣	4. 巻 71
2. 論文標題 『柚珎秘密箱』翻刻、現代日本語訳と注釈 (上)	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 高知大学学術研究報告	6. 最初と最後の頁 49(16)-64(1)
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11501/1786157	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中 圭子, 中野 道治, 北島 宣	4. 巻 71
2. 論文標題 『柚珎秘密箱』翻刻、現代日本語訳と注釈(中)	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 高知大学学術研究報告	6. 最初と最後の頁 65(16)-80(1)
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11501/1786157	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中 圭子, 中野 道治, 北島 宣	4. 巻 71
2. 論文標題 『柚珎秘密箱』翻刻、現代日本語訳と注釈(下)	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 高知大学学術研究報告	6. 最初と最後の頁 49(16)-64(1)
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11501/1786157	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計28件(うち招待講演 9件/うち国際学会 8件)

1. 発表者名 田中圭子
2. 発表標題 武雄鍋島家資料・武雄市蔵「香調合法」について
3. 学会等名 古典研究会(於・広島大学東広島キャンパス)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 田中圭子
2. 発表標題 新作薫物(しんさくたきもの)の趣向と空間(総合テーマ:東アジアの憩いと空間)
3. 学会等名 東アジア伝統文化研究会(於・Zoom Meeting)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 田中圭子
2. 発表標題 武雄鍋島家資料・武雄市蔵『香調合法』について
3. 学会等名 全国大学国語国文学会；第125回大会（夏季大会）（於・大妻女子大学千代田キャンパス、Zoom Meeting）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 田中圭子
2. 発表標題 口頭発表：『源氏物語』匂宮の薫物と 園芸残渣 について 香りを創る人としての再考
3. 学会等名 中古文学会2020年度秋季大会（バーチャル大会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 田中圭子
2. 発表標題 口頭発表：藤原撰閑家伝来の平安時代の香り「菊花」について
3. 学会等名 ワークショップ：藤原撰閑家伝来の平安時代の香り「菊花」の再現を目指して（広島大学大学院統合生命科学研究科附属植物遺伝子保管実験施設主催、於・ほたる荘（広島県東広島市）、オンライン・オンサイト併催）（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 田中 圭子
2. 発表標題 八条殿智仁親王の薫物方とその伝承について
3. 学会等名 第57回古典研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 石橋 健太郎
2. 発表標題 茶・花・香などの室内芸能における「唐物」の受容と影響について
3. 学会等名 第4回東アジア日本研究者協議会（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 巖 如蕙
2. 発表標題 王朝時代の追儻 日唐の「方相氏」の役割についての比較研究を中心に
3. 学会等名 第4回東アジア日本研究者協議会（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 中村 健太郎
2. 発表標題 日本の古筆資料にみられる古鈔本『李善注文選』の本文と現状について
3. 学会等名 第4回東アジア日本研究者協議会（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 日高 愛子
2. 発表標題 芸道としての蹴鞠の歴史と日本における展開
3. 学会等名 第4回東アジア日本研究者協議会（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田中 圭子(司会者・討論者)
2. 発表標題 パネル(グループ)発表：日本伝統文化の歴史と展望：諸学諸芸と諸行事の これまで と これから を考える
3. 学会等名 第4回東アジア日本研究者協議会(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田中 圭子
2. 発表標題 個人発表：日本の中世近世香文化の実相について 芳香剤「薫物(たきもの)」の秘められた歴史をひもとく
3. 学会等名 第4回東アジア日本研究者協議会(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田中 圭子
2. 発表標題 作ってみよう！平安時代の香り
3. 学会等名 平泉のかをり創造プロジェクト(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田中 圭子
2. 発表標題 創ってみよう！鴻臚館の香り
3. 学会等名 鴻臚館体験講座(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田中 圭子
2. 発表標題 鍋島家ゆかりの香り体験会：作って、丸めて、かいでみよう！鍋島加賀守ゆかりの薫物「梅花」
3. 学会等名 佐賀大学・小城市交流事業特別展（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田中 圭子
2. 発表標題 作ってみよう！平泉の薫り
3. 学会等名 平泉のかをり創造プロジェクト（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田中 圭子
2. 発表標題 平安時代のお香について
3. 学会等名 平成30年度第2回視覚障がい者教養講座（於・藤沢市 湘南台公民館）（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田中 圭子
2. 発表標題 薫物体験ワークショップ
3. 学会等名 逢いに来んしゃい！佐賀大学の「宝」の数々に（「来てみんしゃい！佐賀大学へ」企画 佐賀大学附属図書館 図書館月間 2018、於・佐賀大学附属図書館）（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 田中 圭子
2. 発表標題 文化の受容と表象：日本の香文化の萌芽期に見る東アジアの影響
3. 学会等名 第3回東アジア日本研究者協議会国際学術大会（於・国際日本文化研究センター他）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 田中 圭子
2. 発表標題 『薫集類抄』が伝える遣唐使時代の薫物
3. 学会等名 平成30年度市民講座「鴻臚館学」入門（於・福岡市 中央市民センター）（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 田中 圭子
2. 発表標題 早歌に詠まれた香、薫物 その時代性と表現効果について
3. 学会等名 古典研究会（於・広島大学）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 田中 圭子
2. 発表標題 作ってみよう！平安時代の香り
3. 学会等名 平安時代の香りを再現！！平泉のかをり創造プロジェクト（於・毛越寺 浄土の館）（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田中 圭子
2. 発表標題 「柚珍秘密箱」の注釈
3. 学会等名 第6回東アジア日本研究者協議会（一般パネル：東アジアから伝播した日本のカンキツの起源、代表：北島 宣）（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 田中 圭子
2. 発表標題 小野通女ゆかりの匂油（においあぶら）調査ワークショップ
3. 学会等名 同志社大学（主催）；松榮堂（協力）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 田中 圭子
2. 発表標題 キクタニギクを利用した薫物「菊花」調査ワークショップ
3. 学会等名 広島大学（会場）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 田中 圭子
2. 発表標題 江戸時代の料理書『柚珍秘密箱』に見る 柑橘の用途とその特徴について
3. 学会等名 公開シンポジウム：日本の柑橘はどこから来たのか？ - 海のカンキツロード - 2023年3月26日 京都先端科学大学, Zoom Meeting
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 田中 圭子 (司会者; 討論者)
2. 発表標題 パネル総合テーマ: 日本文化の実践と継承
3. 学会等名 第6回東アジア日本研究者協議会 (一般パネル: 日本文化の実践と継承 (申請代表者: 田中圭子))
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 田中 圭子, 北島 宣, 福田 智子
2. 発表標題 第1回; 薫物「盧橘」作りワークショップ
3. 学会等名 2023年度全4回 シリーズ講座; 香りでつづる京の四季
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 三ツ松 誠, 村上 義明(編)	4. 発行年 2019年
2. 出版社 佐賀大学地域学歴史文化研究センター	5. 総ページ数 115
3. 書名 図録: 京の雅と小城藩(NCID:BB29348149)	

1. 著者名 河添 房江, ほか(編)	4. 発行年 2023年
2. 出版社 武蔵野書院	5. 総ページ数 12
3. 書名 源氏物語を読むための25章(仮・入稿中)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

江戸期「あこがれの女性」の匂油再現：京都の「松栄堂」協力、大学生ら調査
 京都新聞、朝刊、2023年2月22日
<https://www.kyoto-np.co.jp/articles/-/976279>

平泉の「かをり」は：創造プロジェクト、5種類試作し選考会
 岩手日日新聞2020年10月23日
<https://www.iwanichi.co.jp/2020/10/23/3563317/>

みやびな香り堪能 平泉でワークショップ 平安の「薫物」等作成
 岩手日日、2019年12月8日
<https://www.iwanichi.co.jp/2019/12/08/399137/>

客員研究員の活動報告（「広島女学院大学総合研究所年報」Vol.23）

みやび「香」の世界；平泉のかをり創造プロジェクト
 岩手日日、2019年4月28日15面
<https://www.iwanichi.co.jp/2019/04/28/316096/>

平泉・プロジェクト発足；平安の「かをり」再現
 岩手日報、2019年4月28日20面

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	日高 愛子 (HIDAKA Aiko) (20706741)	熊本大学・大学院人文社会科学研究所・准教授 (17401)	
研究分担者	中村 健太郎 (NAKAMURA Kentaro) (60596922)	帝京大学短期大学・その他部局等・専任講師 (42638)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	石橋 健太郎 (ISHIBASHI Kentaro)	広島県立歴史博物館・主任学芸員	
研究協力者	嚴 茹蕙 (YEN Ju-Hui)	北京理工大学珠海学院・助理教授	
研究協力者	黒岩 淳 (KUROIWA Atsushi)	福岡県立北筑高等学校・教諭	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	キューン ミッシェル (Kuhn Michelle) (90752832)	名古屋大学・大学院法学研究科総合法政専攻・講師 (13901)	
研究協力者	中野 道治 (Nakano Michiharu) (40705159)	高知大学・教育研究部自然科学系農学部門・准教授 (16401)	
研究協力者	福田 智子 (Fukuda Tomoko) (50363388)	同志社大学・文化情報学部・教授 (34310)	
研究協力者	北島 宣 (KITAJIMA Akira) (70135549)	京都大学・名誉教授 (14301)	
研究協力者	米倉 綽 (Yonekura Hiroshi) (24302)	京都府立大学・名誉教授 (24302)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 東アジア伝統文化研究会；第1回オープン研究会；総合テーマ「東アジアの憩いと空間」；於：Zoom Meeting	開催年 2022年～2022年
---	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------